

Title	ベンチャーキャピタルにおける投資先企業の価値評価について
Sub Title	
Author	新井, 規夫(Arai, Norio) 小幡, 績
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2005
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2005年度経営学 第2021号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002005-2021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	小幡 研究会	学籍番号	80430080	氏名	新井 規夫
(論文題名)					
ベンチャーキャピタルにおける投資先企業の価値評価について					
<p>本研究では、日本のベンチャーキャピタル・ファンドの収益率は米国と比較して劣ることを確認し、これを向上させるための手段として投資先の選別方法とバリュエーション手法に注目をした。ベンチャーキャピタルの役割は投資先ベンチャーを選別・支援する事によってその付加価値を高める事である。文献調査等により、日米のファンドの収益率の差、目標収益率の日米格差、ステージ毎の需給ギャップ、ハンズオフ手法の問題などの課題を確認した。さらに各バリュエーション手法の特徴を捉え、先行研究による結果(「客観的」DCF法の優位性)を念頭に置いた上で、日本のベンチャーキャピタリストへのインタビューについて考察を行った結果、「デューデリジェンスを重視する」かどうか、「バリュエーションをする」かどうかは収益率と相関がありそうだが、「DCF法を使う」かどうかによる収益率の差は今回のインタビューからは推定することができなかった。また、日本のベンチャーキャピタルの傾向である「デューデリジェンスを重視しない」「DCF法を使わない」理由について考察し、前者については「投資時の価格競争」「精度の高い事業計画を作れない」、後者については「手間を惜しむ」「DCF法の理解不足」「DCF法使用の経験不足」「結果責任の欠如」を挙げた。最後に今後の日本のベンチャーキャピタルが取るべき方向性として、「チーム組織」「デューデリジェンスとバリュエーションの際に精査する」「経営支援のための報酬体系」「Reputationの維持」「EXIT戦略の重視」を提言する。</p>					